

捕鯨と日本人

文化としての捕鯨

開館20年記念(企画展)

日本の捕鯨は、縄文時代には既に始まっていたといわれ、江戸時代に技術と組織が発達して産業として定着しました。現在でも調査捕鯨と小型鯨の沿岸捕鯨が行なわれています。

捕鯨は大変な労力と危険、そして高度な技術と組織がいる仕事でした。獲った鯨を、日本人は骨にいたるまで捨てるどころなく大切に利用してきました。そのため捕鯨の盛んな地域を中心に、捕鯨は一つの歴史、文化として形成され、今日でも各地の祭礼や伝統芸能などの中に、鯨の文化は受け継がれています。

この企画展では、捕鯨の歴史と文化を中心に、鯨と日本人との関わりについて紹介します。この企画展をご覧になり、捕鯨が日本の歴史、文化の一つであることを再認識していただき、その将来を考えるきっかけにいただければ幸いです。



鯨一件の巻(上村家本) 江戸後期 唐津藩小川島(現在の佐賀県唐津市呼子町)での捕鯨の絵巻。捕鯨図、道具の説明、鯨の体の説明などがつの絵巻にまとめられている。(個人蔵 写真提供…呼子鯨組)



四日市の鯨船神事のクジラ 2008(平成20)年製作 南捕鯨船保存会 四日市市を含む三重県の北勢地方ではクジラの被り物を鯨船の山車から鉦で突く神事が、夏や秋に行なわれている。(南捕鯨船保存会蔵)



ポスター 鯨肉 美味しい日水のくじら 戦後 日本水産株式会社 日本水産の鯨肉宣伝ポスター。モデルは女優八千草薫。(勇魚文庫蔵 写真提供:佐賀県立名護屋城博物館)



マイワイ 昭和期 マイワイ(万祝)は大漁を祝って船主から配られた祝着である。背に「鯨」の文字と房総のツチクジラの鯨が描かれている。(千葉県立安房博物館蔵)



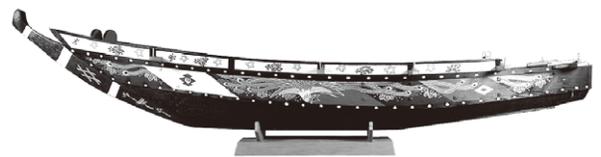
日新丸の鯨狩り(複製版) 1937(昭和12)年 大日本雄弁会講談社 少年倶楽部の1937(昭和12)年2月号の付録。日新丸(16,764総トン)は当時最大の捕鯨母船。(当館蔵)



模型 捕鯨船 チャールズWモーガン 1841年建造 アメリカの捕鯨の全盛期に建造された捕鯨船。1921年に引退するまで、日本近海も含めて80年間世界の海で操業した。(船の科学館蔵)



茶運び人形 1988(昭和63)年 製作:八代目玉屋庄兵衛 江戸時代のからくり人形の一つ。茶碗をおくと前進し、受け取ると帰る動きをする。この人形のゼンマイの材料には、昔からセミクジラの髭が用いられている。(横浜人形の家蔵)



模型 勢子壱番船 昭和期 縮尺:1/10 江戸時代、鯨に鉦を打つ羽刺が乗る勢子船の模型。壱番船は最初に鯨に鉦を打つ船で、紀州では通常絵柄に鳳凰がデザインされていた。(太地町立くじらの博物館蔵)

表資料 上/大漁鯨のぎわひ 1848~51(嘉永元~4)年頃 画:歌川国芳(勇魚文庫蔵)
下/捕鯨図屏風(右隻) 江戸初期 画:土佐光則(複製:国立歴史民俗博物館蔵 原資料:大阪歴史博物館蔵)

◎帆船日本丸総帆展帆=8月24日(日)、9月15日(月・祝)、28日(日)

横浜マリタイムミュージアムは、9月29日(月)から休止し、開港150周年にあたる来年の4月に「横浜みなと博物館」としてリニューアルオープンします。



交通:みなとみらい線みなとみらい駅/馬車道駅下車徒歩5分
JR根岸線・横浜市営地下鉄線桜木町駅下車徒歩5分

横浜マリタイムミュージアム
〒220-0012 横浜西区みなとみらい2-1-1 Tel.045-221-0280(代)
帆船日本丸記念財団・JTJ共同事業体
<http://www.nippon-maru.or.jp>